No. 14（2016. 3）

武庫川女子大学
武庫川女子大学短期大学部

FDニュース

第14号

● 目　次 ●

〔1〕『Teaching Tips　授業改善のための工夫･失敗事例』の発行と今後の活用について
〔2〕FD 研修会開催報告「大学で教える人のためのルーブリック評価入門」
〔3〕学部 FD の取り組み
〔4〕教育改善・改革プラン「授業改善のための研究会制度」が設立されます
〔5〕SD 推進委員会が発足し、活動しています
編集後記

『Teaching Tips 授業改善のための工夫・失敗事例』の発行と今後の活用について

平成28年１月に、本学の『Teaching Tips 授業改善のための工夫・失敗事例』が発行されました。この冊子には、平成27年度以前に開講された科目から、先生方が授業改善のために実施した取り組みが掲載されています。掲載科目数は、295名の教員（専任・非常勤含む）から計339件です。

授業改善の取組みのポイントとして、半数を超える科目で「理解を深める取組み」、「意欲・関心を高める取組み」が紹介され、さらに、「時間外学習を促す取組み」、「発言を促す取組み」などが挙げられています。学生が授業の内容を理解して自ら学ぶ意欲を持ち、双方向の授業を通して主体的に学習するために、先生方が様々に取組んだ事例が紹介されている貴重な資料です。

表１・図１は、高等教育の授業を考える際によく引用される「よい授業の実践のための７つの原則」です。現在でも日本の様々な大学で参照されます。本学における授業改善の取組みのポイントとあわせてみると、理解を深め意欲・関心を高める取組みは、教員との交流を通して学生の意欲を育み、授業中の発言や時間外学習を促す取組みが学生の主体的に学ぶ機会を作っているといえます。また、学習態度を良くする取組みによって相互の信頼関係が築かれ、学生の継続的な学びにつながると考えられます。

本冊子に掲載された工夫・失敗事例が先生方の授業改善のための情報共有に資し、個々の FD から大学全体の FD へと一歩進むことができますよう、FD 推進委員会も全力で取り組んで参ります。

この冊子は、学院長・学長の強い思いを受け、先生方の様々な授業の工夫事例を FD 推進委員会がとりまとめました。最後になりましたが、先生方にはお忙しい中、原稿執筆にご協力いただきましたことを心よりお礼申し上げます。

表１　よい授業の実践のための７つの原則[1)]

Good practice in undergraduate education:	大学におけるよい授業は：
1．Encourages contacts between students and faculty.	1．学習者と教授陣の交流を促す。
2．Develops reciprocity and cooperation among students.	2．学習者相互の関係と協力を育む。
3．Uses active learning techniques.	3．能動的学習法を用いる。
4．Gives prompt feedback.	4．迅速なフィードバックを与える。
5．Emphasizes time on task.	5．学習時間を重視する。
6．Communicates high expectations.	6．高い期待を伝える。
7．Respects diverse talents and ways of learning.	7．多様な才能と学習方法を尊重する。

1）Chickering, A. W., and Gamson, Z. F., "Seven principles for good practice in undergraduate education", American Association of Higher Education Bulletin, 39 (7), pp.3-7, 1987

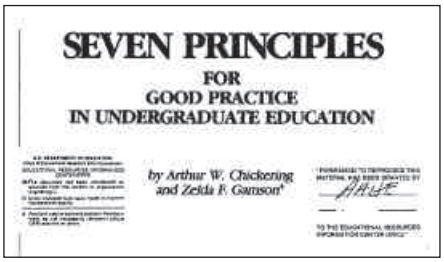


図１　Chickering, A. W., and Gamson, Z. F.（1987）

（FD 推進委員長　北村　薫子）

FD 研修会開催報告「大学で教える人のためのルーブリック評価入門」

教育・学修成果の評価の厳密化と効率化を進めるために使われる評価ツールの一つである「ルーブリック」は、アメリカで1970年代以降に教育に対する社会からの要求を背景に学修成果を評価する動きが高まったことに端を発し、現在は大学教育において広く活用されています。日本ではこれまで初等中等教育での活用が中心でしたが、学士課程教育で育成される能力の明確化や学修成果の客観的評価の導入が求められる近年において大学での導入事例も増えています。

FD 推進委員会では、大阪大学全学教育推進機構・准教授 佐藤浩章先生をお招きして、ルーブリックについて実践的に学ぶための研修会を開催しました。

日　時：平成27年12月22日（火）16：40～18：40
場　所：中央図書館 6 階　ラーニングコモンズ　C-603
内　容：開催挨拶・司会（FD 推進副委員長　三浦 秀松）
　　講師紹介（FD 推進委員　齊藤　文夫）
　　総括・閉会挨拶（FD 推進副委員長　三浦 秀松）
参加者：教員17名、事務職員 7 名

初めに、ルーブリックの目的や種類、効果的な活用方法等について説明があり、その後、ルーブリックの作成手続きと様々な事例紹介をもとに、参加者自身の授業で活用できるルーブリックを作成しました。更に、参加者同士がペアワークを行い、各自が作成したルーブリックをブラッシュアップしました。

ルーブリックは教育現場以外にも活用出来るツールであることから、事務職員においては、職場の業務改善や個々の教職員レベルの目標管理と課題解決等を想定してルーブリックを作成しました。

研修会の内容及び今後の授業改善への活用に対する主なご意見、ご感想は以下の通りでした。

・自分の担当科目の評価を見直す良い機会になった。
・他の先生との意見交換により共通理解が進んだ。
・この時間では十分なやりとりが難しかった。
・上級編の研修会も開催して欲しい。
・ルーブリックの手法を授業で展開することにより、学生の学修効果向上が期待できる。
・学生にわかりやすい言葉でグループワークの議論基準やレポート作成基準を示せることにより、学習効果が高まる。
・学生は到達目標が理解しやすく自己評価が可能になり教員は効率的で効果的な評価が可能になる。

・有効活用すればシラバスの見直しにつながり、教員と学生が目標を共有出来る。
・薬学部ではパフォーマンス評価が求められている。学科 FD としての開催も期待する。
・記述式レポートやグループワークには非常にうまくマッチする方法である。
・評価の指針がよくわかり、学生も納得出来ると思う。グループ活動の際に試してみたい。
・ルーブリック評価を使うと公平で的確な評価が可能になる。
　更に評価のポイントを考えることによって教育方法の改善にもつながる。

この他、今後の研修会で取り上げて欲しいテーマとして「アクティブ・ラーニングの実践的研修」、「グループワーク事例の映像を用いた研修」「教員ごとの成績評価を合わせる方法」等の実践的なものから「大学全体の教育改革と授業改善の課題とその改善策を理解したい。」、「全教員対象の体系的な研修制度を作って欲しい。」というような全学レベルの組織的な教育改革に向けてのご意見もいただきました。

FD 推進委員会では、大学教育の質向上につながるような企画を今後も検討してまいります。

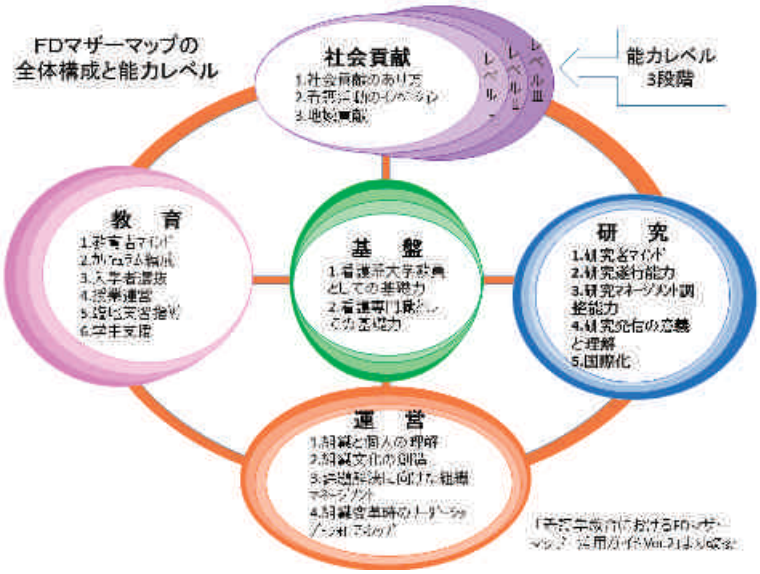
（FD 推進委員　田中　邦子）

学部 FD の取り組み

看護学部　学科長　藤原千恵子

看護学部は、患者さんの生き方や価値観を尊重し、さまざまな角度から支援を考え実践できる“360°看護力”を持つ学生を育成することを教育目標に掲げて平成27年４月に開設され、早くも１年がたちました。看護師の国家試験を受験するために必要な科目、臨地実習では、病院や地域の施設の看護師や保健師、看護師や保健師の資格を持つ教員の指導を受けて、学生や院生が実際に受け持ち患者をケアすることが求められています。看護学教育では、知識だけではなく実践力の育成も重要な要素になっています。

看護学部では、各部門のスペシャリストの方が教員として赴任していますが、大学での看護教育を初めて担当する人がほとんどを占めています。そこで、看護学部の独自の FD 活動では、新任助教を対象とした看護学部の教育の考え方と成人看護学や小児看護学などの専門領域での教育課程について講義する「大学教育や看護学教育に関する内容」（２時間×７回）を企画・実施しています。経験のある教員も可能な限り参加し、看護学部の教育目標を確認し、各科目の教育課程を知ることで相互の連携を図ることにも活用しています。



また、全教員を対象に教育に関する多様な能力を客観的に評価できる「看護学教育における FD マザーマップ」の活用についても企画しました。FD マザーマップは、看護教育系と高等教育系の委員が参加した５年間のプロジェクトで開発されたもので、阿曽学部長も開発メンバーとして参加しています。この FD マザーマップは、看護系大学全体の教育の質の向上を目指すことを目的に、教員に求められる能力を行動レベルで示した内容で、「基盤」「教育」「研究」「社会貢献」「運営」から構成されており、能力レベルを「レベルⅠ：知る段階」「レベルⅡ：自立してできる」「レベルⅢ：支援、指導、拡大できる」の修得レベルで示したものです。FD マザーマップは、上図のようなもので、ウェブサイトに公開されており、教員自身の能力を知ることができます。そのため、個人レベルで能力の修得状況を継続的に確認できるだけでなく、学部の組織全体の能力の評価としても活用できるようになっています。

その他、近隣の看護系大学で学生支援の実績がある先生を講師としてお招きし、国家試験受験に向けて、学生への効果的な支援のあり方について考える機会を設けました。さらに、大学院を担当する教員を対象に、修士課程での研究指導や論文に関するコンセンサスを得るための企画など、積極的な FD 活動に取り組みました。

看護学部では、今後、大学全体で企画される FD への参加を推奨するとともに、看護の専門性に関する教育力の向上を目指した内容の学部独自の FD を企画・推進したいと考えています。

「授業改善のための FD 研究会制度」が設立されます

平成27年４月に募集がありました「教育改善・改革プラン」において「授業改善のための研究会制度の設立」の提案が採択されたことから、平成28年度より FD 推進委員会の下部組織として個人や学科の枠を超えた有志で集まる「授業改善のための FD 研究会（以下「FD 研究会」という。）」制度を設立し、運用を開始することになりました。

この FD 研究会制度は、授業内容や方法、評価をはじめとする FD の様々なテーマで研究会活動を行い、その成果を学内に還元することでより効果的な FD 活動を大学全体として展開することを目指すものです。申請者は研究会の代表者とし、本学の専任教職員（嘱託を含む）に限りますが、非常勤講師の先生方も研究会メンバーとして参画いただくことが可能です。

1　FD 研究会開設の条件

FD 研究会開設の条件は原則として以下の４項目を満たしているものとします。

（１）「Teaching Tips 授業改善のための工夫・失敗事例」に掲載されている事例を活用または発展させている活動であること
（２）授業改善に結びつく活動方針・活動内容が示されていること
（３）既存の FD 研究会と研究領域が重ならないこと
（４）２名以上の学内教職員が参加していること

2　申請方法

申請者は、info@MUSES に掲示しています「FD 研究会開設及び活動支援申請書申請用紙」と「平成28年度補正予算申請書類」に必要事項を記入の上、メールにて提出してください。

（１）メールの件名は「【FD 研究会】所属　氏名」にしてください。
（２）提出先：教育開発支援室　e-mail：seds@mukogawa-u.ac.jp

3　申請受付期間

平成28年４月１日（金）～６月３日（金）
但し、予算面での活動支援を必要としない場合は、随時申請が可能です。

詳細は info@MUSES「授業改善のための FD 研究会の募集について」をご覧ください。　（教育開発支援室）

SD 推進委員会が発足し、活動しています

平成29年４月１日から大学設置基準において SD が義務化される予定ですが、本学はそれに先駆けて、SD 推進委員会を昨年７月に発足させ活動を開始しました。

大学経営をめぐる課題が高度化・複雑化する中で、事務局職員の業務は学生支援をはじめ管理運営から教育・研究活動支援まで多岐に渡っており、果たすべき役割の重要性が高まっています。SD 推進委員会はそういった時代の要請に応え、事務局職員の業務遂行能力を向上させるために議論し実行していく組織です。「教職協働」という観点から、今後、目的や必要性に応じて FD 推進委員会とも連携していく予定です。

（FD 推進委員・SD 推進委員長　大澤　潤）

編集後記

国立国語研究所の外来語委員会は、インターンシップを「就業体験」、ステレオタイプを「紋切り型」、ユニバーサルデザインを「万人向け設計」などと日本語への言い換えを提案している。氾濫するカタカナ語への対策なのだが、これは10年ほど前の話。おそらく今では、少なくとも上記３つについては、カタカナ語の方が理解しやすいのではないだろうか。

FD 委員会でもよくカタカナ語に出会う。「ルーブリック」とは、元々キリスト教の祈禱書に書き込む際に用いた赤いインクを意味するそうで、あえて日本語にすると「成功の度合いを示す数値的尺度」となるようだ。この語もいずれ日本語への言い換えを不要とする時が来るのだろうか。FD 研修会を通じて出会った「ルーブリック評価」、自身の授業にも早速取り入れていきたい。